
時空放浪記

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空放浪記

【Nコード】

N2624D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

俺の名は、スカイリアルグレイ。宝石専門の世間に音に聞こえし大泥棒さ！今夜も眠らず一働き。かの有名な時空管理局の宝石狙い。だけど、事件はここで起こったんだ・・・

第一章 金は天下の回りモノ

『金は天下の回りモノ』なんてこの世の掟。歪みきつた廃墟のこの世界に通用しないような嘘寒い言葉は俺には一切関係ない。だって、それは有るところには有るし、無い所にはどう探したって無いんだもの。だから奪い取るのみ。そう、俺は今を騒がすお尋ね者のしがない大泥棒なのさ。

名前はスカイ＝アル＝グレイ

この名前を知らない者はいないはずだろう。専門は宝石泥棒。で、今日も荒稼ぎの為に盗みに入ろうと思い、世間に名高い宝石が管理されている、ここ時空管理鉱物取り締まり研究所と言う場所に侵入しているのさ。

しかし、音に聞こえしこの研究所の、何と警備が嚴重なこと？ 潜り込むのがこんなに困難だなんて思いもよらなかった。そこらの宝石店に侵入する方がどれだけ簡単であろう事か？ 赤外線は張り巡らされているは、監視カメラに、指紋コードのパスワード。でもそれをクリアしてこそ本当のプロって言う者。しかし！ それはこの俺様の抜かりない所。事前に指紋コードを盗んでいるし、監視カメラ、赤外線は俺の開発した高度なセンサーが反応してくれるから問題は無い。後はこれらに対し着実に対応するだけ。だからどんなに山積みになされた難関も逆に簡単。全く『盗んでください』って言っている様なモノな訳さ。此処まで徹底されていても、何だかやる気が失せる。人って、困難だから、余計に燃えるって言葉、知らないかな？ これって俺が天才だから言える言葉なのかも知れないけどね？

最後の監視カメラに画像妨害装置を取り付けて視界を工作するだけで、いとも簡単に宝物の宝石室に潜入完了。

中は赤外線警報装置も無い。そこは覆いかぶさる様な透明ドームで天窓の有るただの個室。その部屋中にガラス張りに整理されたお宝発見！ どれもこれもかなりの値打ち品！

「うひょー！スンゲーお宝ジャン」

小躍りしたくなる俺は、心躍るそれを抑えつつすかさず、左手に嵌めているリングの赤いボタンを『ポツツ』と押す。すると、大型のアタッシューケースが飛び出したのをこの目で確認した。俺はこれをいつも愛用している。盗んだ宝石を入れるための所謂宝箱。これなくしてこの仕事は成り立たない。

「噂には聞いてたけどこんなに有るとは思ってなかったぜ。これは盗み甲斐があるというものさ」泥棒冥利に尽きるとはこのことだね！」

俺は片っ端から質の良いのを選びそのケースに入るだけの宝石を選び抜き、そして収納した。

「さてと、これで今日の仕事は終わり」

後はこの宝石を金に換えるだけ！そんな事をのんきに思つて一息入れる。しかし、何だつてこの部屋はこんなに緊張感が無いんだ？ここに入る方がどれだけ大変であつたか？

一息入れていると、不思議に他に興味の無いこの部屋の内装がハッキリ断片化した。

「何だ？あれは……」

そう、自分の仕事にかかりつきりですっかり見落としていたのだ。この部屋の中央に、石煉瓦の階段がある。そして、その上から鈍い赤色をした仄かな光が放たれていることに……

俺は、その光が何なのか？それが無性に気になって、取り敢えずアタッシューケースをリングに収納し階段に足を掛け上り始めた。淡く揺らめくその光は、上るに連れて濃く色づいている。そして、最後の一段を踏み上った。

「何だよ……この赤い宝石は？」

透明ケースに収納されてあるだけではなく、その石からは無数のコードが天井に延びていた。俺は気になってその石を取り出すために、ケースの中に手を差し入れた。すると、

「何だ、お前は？」

突如耳にそんな言葉が響いてきた。

周りを見回すが、人らしい気配など無い。

「お前も、儂の力を目当てに奪いに来たのか？にしては、周りの寶石にしか目をくれてない様子だが？」

俺は、この石が喋っていることにやっとのことで気がつき、

「石が意志持つて喋った！」

動転して、思わず階段を転げ落ちてしまった。

「痛てゝ！なんだそりゃ？俺は大泥棒スカイⅡアルⅡグレイ様だ！寶石漁りに来たんだ。知るかよテメーの事なんか！」

腰は痛いし、この人を見下ろしているような言葉遣いが気に入らないし、訳が分からないし思わず当り散らした。

「儂が何なのか分かってないらしいな？面白い奴だ。どうれ、儂もこんなところで繋がれているのにも飽きた。お前と一緒に行くとしてようか！」

「へ？」

石がそう言うと、階段上から突然まばゆい赤い光が眼光に人束のラインとなって飛び込んできたんだ。

「痛　　！」

俺は思わず大声を上げてしまった。とてつもない苦痛が右目を襲った。すると、何がどうなったのか？痛みで押さえている俺の右目から滴る赤い血が掌にべつとりと付いていた。

そして、それをきっかけとして非常警報装置が鳴り始めたのである。

「やっべー！逃げなきゃ！」

腰を上げる姿勢になった俺は、背後でカシャカシャと写真でも撮られているかのような音を聞いた後、次の瞬間、グニャつとした空間に放り込まれた。背後から『クルッピー』という鳴き声らしき声が聞こえる。そして気がついたときは何処かの村山に迷い込んでいたのであった。

第一章 金は天下の回りモノ（後書き）

かなり短いお話です。章に区切るのも面倒だけど、区切ってみました。

読みやすいお話なので、是非目を通してくださいます。

第二章 バインとルマイン

「んで？今回は一体何処に居るんだ？」

どのくらいの月日が過ぎたのであろうか？あの時俺の右目に宿った石。名前はルマイン。と言うらしい。らしいってのが、イマイチ俺には要領を得ないのだが、こいつはあの研究所で、『時空移動』の管理をしている石であることだけは分かった。自らの発する光が時空移動に大いに役立つのだと言う事くらいしか判らない。だって只の泥棒に、それ以上の専門的事柄を言われたとしてもチンプンカンプン。大まかなことが判っていればそれで良い。

そして、何百回目かに渡る時空越えをして今回は此処に来ていた。俺たちは、滞在期間を一つの時空越えに対して大体三日間を目安に移動している。

「で、此処は何処だよ？」

何度も言わせるなよ……川辺に座り込んで、自らの顔を洗っている俺は、水面に映っている眼帯で隠していた右目の今むき出しになっているルマインに向かって問いただした。

左目の、明るい緑色した瞳の色とは正反対の色の赤い瞳が語る。

「齢暦千三年のアイハダ村だ。時空越えをしているお前はある意味バンパイアーのように年をとらないから、時間を気にすることはない」

機械が話しているみたいだな。いつも思うことだが、俺はこの頭に響いてくるような声が、気に入らない。けど、こいつに問いただしても、人に宿ったらこのルマインが死ぬまで俺の目眼に宿ると言う。だから余計に厄介だ。俺の夢は、こんなことじゃ無い。

「ははは、訊くだけバカでした」

「楽しいであろう？こうやって、時空を超えての旅は？」

「アホみたいに楽しいね……お前の言ってた力が、時空超えて、しかも翻訳まで兼ねてるなんて知らなかったわ」

うんざりな表情で呟く。年をとらないってのはある意味いいことでは有るが、まるで、時差ぼけにでもかかった気分だ。

「しかも今では、俺はばっちりお尋ね者の身分でだな、時空管理鋳物取り締め研究の方で撮られた写真が出回ってるなんて、考えても頭が変になりそうだぜ……」

思わず皮肉を込めた笑いしか出来ない。

「愛おしいマイホームにも戻れずに、こんな放浪の旅をしなくちゃならないなんて、素敵過ぎて笑いが止まらないってもんだ！」

全てお前のせいだぞ。と言わんばかりに水面に映っている自分の顔に向かって石を投げる。綺麗な波紋が広がった。

「ははは、そうカリカリするな。大いなる力を手に入れたのだぞ？」

「欲しくないってんだ！俺の夢は大金持ちになって、洒落た屋敷に女はべらせて、ウハウハってのが理想だったんだぞ！」

その理想が頭をよぎる。虚しい……

「それは無理だな。お前は未来永劫時空を彷徨う運命だ。お前の右目がくり抜かれるか穴があかない限り死は訪れない！」

その言葉に苛立った俺は、

「暫く眠ってやがれ！」

と、手首のリングから黒い眼帯を取り出し左目を覆うように巻きつけられる。ルマインは、眼帯をして視界を遮っている間は俺と直には話すことは出来ないからだ。

俺は川辺に座り込んで今度は特殊リングの黄色いボタンを押す。すると、長く鋭い針が数本セットになって飛び出した。いつもは鍵を開ける為に使用している物では有るが、今となっては、生活用品と化している。

上流の水際の岩場に、水しぶきが上がった。魚が跳ねる。俺は思わず針をすばやく解き放った。するとどうだろう？プカプカと今朝の食事が流れてきた。俺って器用？なんてね？

「さて、飯にするか……あれ？それにしても、バインはどこに行っただんだ？」

バイン。それは、ルマインが、俺の目に融合した時流れた落ちた血から象られた、ルマインの半身。毛むくじやらでその背には鳥のような翼を持った、得体の知れない生き物。だけど、ルマインの半身とは思えないほど心根の良い生き物である。今では俺の良き相棒。「クルッピー！」

「何処行つてたんだよ？」

魚を焼く用意をしていたそんな中、背後から羽根をばたつかせ、その、バインが飛んでやってきたのである。

「おっ！グミの実じゃん！サンキューな！」

どうやらバインは、朝飯用にグミの実を何処かしらから調達してきたらしい。

「お前も食えよ！」

俺は、自分に渡されたその実の一つを口に放り込んでやる。バインは嬉しそうに、

「クルッピー」

と喉を鳴らしていた。

第三章 アイハダ村

俺たちは、一日後アイハダ村の中心街に来ていた。昨日の朝口に
した物以外何もお腹に入れていない為、かなり空腹である。街は、
屋台など出て大賑わい。何かの祭りでもある様子だ。だけど、俺は
此処で食料を調達など出来はしない。通貨が俺の居た世界とは違う
為、使用することは出来ないし、それに……

「にしても、此処でも俺は指名手配人かゝ有名人はつらいなあゝ」
木下駄の橋に設置されている指名手配人の立て札は、家の軒下にも
貼り付けられていたりして、五百万グランの賞金の文字が配列し
ている。つまり、盗んだ宝石の出所が判ると俺の居所がバレてしま
うと言う仕組みだ。

「今回は、似顔絵か……この時代には写真なんて物は無いのかもな
？でも、この二枚目の顔をここ迄醜男にしてくれちゃって、許せる
ものじゃ無いなゝ」

俺は、もつと男前に絵を描き直した。

「そうそう、こんな所かな？」

満足して筆を締まったところに、バタバタとした音がこちらに近
づいてきたのを感じ取った。

「何だ？」

何が起こっているのかを確かめるために、俺はその方角を見よう
と片目を凝らした。

すると、おぼつかない足取りで人込みを掻き分けるように、俺と
同じ年頃の女の子が乱れた振袖を揺らしながら走ってきた。

「待てー！」

どうやら、追いかけられている様子である。と、気がついた俺は、
娘の容姿に惹かれるかのように、娘の手を引き寄せ、自ら被ってい
る黒マントの中に隠した。

「黙ってて……」

負い掛けて来る男共が通り過ぎる迄、俺は、彼女を隠した。そして、路地から抜けるように静かな飲み屋の路地裏に回った。

既に彼女を見失ったのだろう、男共の声は遠のいていた。俺は、マントから娘を解放すると、

「どうしたんだい？追いかけるなんて？」

とにかく、事情を聞こうと思った。理由がどうであれ？助けないわけはなかったが。

しかし、娘は、

「ユンは？」

どうやら、俺のことよりも誰かを案じている様である。

「ユン？」

おれは誰のことを言っているのか判らなかった為、問い返したが、その娘は俺から離れるように、手探りで道をフラフラと歩き始めていた。

「もしかして、君？目が……」

問いかけようと、危なっかしい足取りの彼女の後を付いていくとすると、

「リンネン！」

一人の青年が路地裏に駆けつけたのである。

「ユン！私はここよ！」

俺は、二人がお互いを気遣いながら抱きしめている様子を見て、きつと不服な顔をしていたに違いない。

「もしかして、貴方がリンネンを助けて下さったのですか？」

暫くして、二人の世界が終わった頃に、ユンという人物が俺に気付き問いかけてきた。

「そう言う事になるのかな？」

素直にそうでは言い切ることが出来ないところは、ヒーローにはなれない俺の短所かもしれない。いや、まあ、泥棒なんだけだね。

「ありがとうございます！」

ユンは丁寧な頭を下げた。そして、ソバカス顔をクシャクシャにして笑って来たのであった。

俺は、ユンという青年に導かれて、ユンの住んでいる家に訪れた。簡素な瓦葺の木の家。少し小高い丘の上にあるこの家は、周りは田畑で覆われている。多分、ユンという青年は、この世界で言う農民であろう。

「リンネンを助けて頂き、ありがとうございました！お礼はこのくらいしか出来ませんが……」

この位というものでも、俺とバインには有難いものであった。背中とお腹がくっ付きそうな位の空腹感。それを満たしてくれるだけの、質素ではあるがご馳走を頂いたのである。

悪党も、時には善い事をするものだ！しみじみ感じ入る。

「で、追い掛けられた理由ってのはなんだい？」

夕食を済ませ、一息入れた俺はユンに問いかけた。ユンとリンネンは寄り添って少し顔を見合わせるような形で、俺に向き直った。

「リンネンは、この村の地主、タンペイに見初められたのです、そして強引に明日結婚しなければならなくなったのです」

お決まりなシナリオみたいだ。悪党の地主と、それにひれ伏すか弱き労働者。

「今日の祭りの様子をご覧になりましたか？」

「祭りって……あの軒を連ねるような屋台？」

確かに目にはしている。この村にしてみれば、豪勢な祭りにも思えたし印象がある。

「そうです。タンペイは、前夜祭のごとく仕切って、祭を催したのです。リンネンは囚われの身で、今日まで監禁されていたのを、この僕が助けに入った。今ではタンペイの指揮下、村を上げて捜していることでしょう……」

「ユン……」

リンネンは黒目がちな瞳を潤ませてユンの話している顔を見てい

る。目が見えなくとも、声で判断しているのだろつ。

「リンネンと僕は幼馴染なんです。彼女の為に、この身を呈して守りたかった。あのような強欲の塊のようなタンペイの所には行かせたくなかった！……確かに、リンネンの目を治せるだけのお金を持っているタンペイかも知れない。でも、だからと言って僕はやすやすと……」

と、ユンは側に居るリンネンの肩を抱き寄せていた。俺は思わず見せ付けられているかのようで、苦笑いする。ご馳走様……

「一飯の礼って言葉は有るよな？」

俺は、ボソリと声に出して言った。お金さえあれば治るリンネンの視力。ならば……

「へ？」

「あのさ訊きたいんだけど？タンペイの屋敷って何処？」

既に気付いているのか？バインは、嬉しそうに、

「キュルル〜クツピー！」

と、脇で鳴いている。ユンはどう言うつもりで訊いてきたのか？不思議そうだったが応えてくれた。そして、

「ところで……どちらかでお会いしたことございませんか？それに
お名前は？」

ユンは、訝しげに見詰めていたが、

「気のせいでしょ！全くの、初対面です！」

俺は深々とマントで顔を隠した。まさか、あの不細工な手配書に効力があるなんて……と俺は再び苦笑いするしかなかった。

第四章 タンペイと琥珀

タンペイ宅は、この街の中心に有ることは行ってみれば良く判った。誰もが羨むような豪邸。そして、強欲を尽くしているだけある、門構え。俺は得意げに鼻の頭を指で擦った。

さてと。

「頼もう！」

大きな声で、門の戸を叩く。中は、行方知れずとなった、リンネンの搜索でバタバタと忙しそうにしていた。そして、戸が開いた瞬間、いつもの調子で、俺は後先考えずに、

「おっと、失礼！」

出てきた男に対して回し蹴りを食らわせた。マントが翻る中、バインが飛び出してくる。

「何者？曲者だ！であえゝ！！」

中の従者共が、一斉に俺に向かってくる。こんなのは朝飯前だ！
「バイン！」

俺は、炎が巻き上がる刀に変身したバインの柄を取り上げると、一気に住居内に進入したのである。
俺の信条その壱！

『盗みはやるが、人殺しはしない！』

立ち回りは豪快に且つ慎重に！この炎は業火。自らの身を守る物。決して自らを焼き尽くす事はない。それが俺の宿命。

「近寄ると燃えるぞ！それでも良いってんなら俺は遣り合っても良いんだぜ？」

下段に構えた剣をジリジリと番人たちの前に突き出す。逃げていく者もいれば立ち向かって来る豪傑もいる中、俺は先を急ぐ。俺の持つ炎は一気にこの豪邸を焼き払う様に振りかざしていた。だって

こうすれば、諸悪の根源の親玉、タンペイを燻りだすことが出来るからだ。

それを悟った者の一人が、屋敷に入っていくのが見えた。俺はそいつの後ろを追うように駆け出したのである。

「ご報告いたします！ただいま賊の一人が入ってまいりました！不思議な力を秘めた者です！今すぐ此処を離れてください！」

一氣にまくし立てた男はその場に力尽きるように倒れた。その様子を女をはべらせた狸親父のようなタンペイが、悠長に寝そべっている。

「ふん！時空管理からの要請が来ている賞金首のあの者だろうな。琥珀！お前の出番だ！」

襖の奥に控えていた着流しの浪人風の男はその言葉を聞き入れて立ち上がった。そして、

「御意！」

その場を下がったのである。

「アンニヤロ！何処行きやがったんだ！」

俺は、追い掛けたのは良いが、立ち塞がる敵と、襖を開けるたびに出くわし、足止めを食らっていた。屋敷の五分の一は火が回っただろう。煙と炎でうざったい。そんな中、今倒した敵を押し退け次の襖を開けた。すると、そこで今かと待ち望んでいた者であろう？ヒョロリと痩せた着流しの男が剣を携え立っていたのだった。

「いつまでその威力が続く事かな？」

「ふーん。こりやまた自信ありげなことぞ？」

俺は炎が上がる剣を下段に構える。すると、浪人風の男の後ろから『スルリ』と大蛇が現れ、男の右腕に這い上がってくる。

「ブッキミ」

男はそのまま右腕を上げると、蛇はグルグルと巻き上がり、その掌の先まで来ると、蛇の目がピカツと光り大剣に変わる。

「キュルルーン！」

突然、バインの剣が同調するように鳴き始めた。

浪人風の男が一振りすると、金色の鱗粉が辺りに舞う。その鱗粉が俺の方に流れてきた為に、俺は剣を大きく振る。『ブオツ』と炎が燃え上がると、鱗粉を燃え上がらせた。

『パラパラ』とその燃えカスが足元に落ちた。しかし、それ以外の畳や障子が、見る見る間に砂に変わっていた。

「あぶねー！」

俺は、浪人風の男を睨み付けた。

「テメー！何者だよっ！」

すると、浪人風の男が、額に巻きつけている布をスルスルと取り去る。そこには、飴色の黄金色をした石が埋め込まれていた。

「我が名は琥珀。もう忘れたか？ルマインよ」

ルマインのことを知っている？と言う事は、こいつは時空管理の……それを見たとき、俺の右目をズキリと鈍く痛み、眼帯から赤色の血が滴り落ちてきた。

「へへ直々のお出ましかい？大げさなこつて！さてどうするよ？バイン？」

「キュピツピツピー！」

「そつかよ！なら任せたぜ！」

俺は、バインの言葉を受けて琥珀に飛び掛って行く。額を狙うかのようにして、剣が振りかぶられる。が、それを受け止める琥珀。

「ルマイン？お前自身で戦う気はないのか？」

不敵な笑いの琥珀。

「キュロツピー！ピツピー！！」

「ふん！テメーごときに出てくるつもりはねえとよ！」

横に振り切られる剣。炎が『ブワツ』と広がる。

「好戦家のお前がか？ならそのまま戦うがいい！一体何時まで保つかな？」

琥珀の持つ力の一部なのであろう。かなりの飛躍で俺の頭上を越

え、背後に回り、剣を槍に変化させて突く。俺は間一髪で避けるが、マントの右袖部分がサラサラと砂になり落ちた。そのことに気がつき、俺はマントを脱ぎ捨てる。現代風のタートルネックにジージャンの真っ黒な身を『ピタリ』と包む服が露になった。

「やるー！なめやがってー！」

俺の剣も変化し、ヌンチャク状態になる。『ヒュン』と琥珀めがけて放たれるが、槍で振り落とされる。上手く的に当たらない。

「何とかなんねーのかよ！」

苛立ち始める俺。実、短気であった。

「ピッピッピーーーーー！！！」

『ボツ』と炎が大きくなる。その炎が俺の手を覆うように発せられたので、

「アチ　！っておいっ、怒んな！」

俺は思わずヌンチャクを落としそうになっちまった。

「バカ同士だな……」

クククと嫌味な笑いがこぼれている。

「バカはその分しつけーの！さっさとくたばりやがれっ！」

琥珀の挑戦に乗って、俺は、炎の舞い上がるヌンチャクを頭上で振り回す。

「バカの一つ覚えか……くだらん」

琥珀は、再び宙に舞う。しかし、その宙に舞った瞬間を俺は見逃さなかった。待ってましたとばかりに、ヌンチャクを矢尻に変化させる。そして、飛び上がり炎を影に炎が消える瞬間を見計らうと、宝石の有る額を目掛けて振り下ろす。

「何！不覚……」

『パリーン』と琥珀が割れる。俺は着地して、

「ざまーねえや。へへん！さあて余興はここまで！と次急ぐか！」

しかし、その浪人が、サラサラと砂になって崩れ去るのを見て一瞬緊張が走る。自らの最期は？でも、その様子を一瞥すると、再び自らの使命を果たそうと、再奥へと走り出した。来た道の柱が炎で

崩れ落ちていった。

辺りの部屋が炎に包まれているところに、一箇所だけこの部屋はまだ安全であった。『バンッ』と俺は勢い良く襖を開ける。

「テメーがここの地主って奴かよ？奇妙な配下差し向けやがって！」その言葉を聞いてひれ伏すかのように土下座をするタンペイ。ある意味気持ちが良い。

「済まない！許してクレ〜何でも言うことを聞こう！時空管理鉱物取り締まり研究所にも黙っていてやる。だからこれ以上……」

余りにもへつらうタンペイに拍子抜け。しかも、逃げもせずこの場所に留まっている以上、剣を向けることも莫迦らしく思った俺は、「ふん！なら、お前が持っている全ての金と、明日ある結婚式ってやらをチャラにするってのなら考えんでもないね？」

バインは元の姿に戻り、俺の肩にちょこんと乗っかっている。タンペイは顔を上げ、

「おおつ、ありがたや〜それで許してもらえと言うのであれば、いくらでも持つていってくれ！金は、裏の蔵に有るぞ！鍵は此处だ！」

まるで、用意でもしてあったかのように、鍵はタンペイの正面の畳の上に置かれた。そして、それを取ろうとした俺はかがみこんだ。「ヘッヘッ！察が良いじゃない！」

それを見て、ニヤリとタンペイが口の端を歪ませた時、「覚悟！」

安心させての非常極まりない行為。背後で、配下が俺の背中を狙って刀を振り下ろしていた。しかし、肩に止まっていたバインが真剣白羽取りで防ぐ。

「キュルッピー！」

何処にそんな力があるのか？バインは刀と部下ごと吹き飛ばしていた。

「どーもバイン！やつぱり許さない！」

手の指を『パキン』と鳴らすと、バインは炎の剣に早代わりして、

立ち上がった俺の右手に収まる。そして、タンペイを見下ろし、剣を振りかぶった。

炎上するタンペイ宅のその中で、

「ぎゃーーーーーーーっっっ」 声は響き渡ったのである。

第五章 エピローグ

ユンと、リンネンが玄関先に居る。

再び黒いマントを頭から被っている俺。

「これ、やるよ」

昨夜手に入れた金を、特殊リングに収納しておいた。二十万グラ
ン分が袋に入っているのを差し出す。よく分からない仕組みになっ
ているそれを目をぱちくりさせながら見ているユンを他所に、俺は
満面の笑みで渡した。

「え？でも……」

躊躇しているユン。どうして？と不思議そうであった。

「心配ないから！昨夜ご馳走いただいた礼よ。それにこれ地主から
巻き上げ……じゃなくて、頂いた物なんだな。気にしない気にしな
い！」

バインの首らしきところを猫のように撫でながら俺は満足そうに
笑った。

「それに、結婚式つてのも取りやめになったから安心だ。良かった
じゃん」

「そうですか……それではお言葉に甘えて」

ユンはその袋を受け取る。

「リンネンちゃんの目。その金で早く良くなるようにしてあげるよ」
片目しかない瞳でウインクする俺。傍目には只笑っているように
しか見えないであろう。

「本当にありがとうございます」

深々とお辞儀をする二人。

「じゃっ！俺はこの辺で。ばい」

二人を背に俺は歩き始める。

「あ、あのっ！」

突然の呼びかけに俺は振り返る。

「お名前は？」

フツと笑うと俺は半身を返し、

「只の孤独な旅人！それで良いっしょ？」

と、後ろ向きでヒラヒラと手を振って歩き始める。

「キュピツピ？」

バインが余りにも冷やかすので、

「うるさい！格好よく去ってるんだから良いの！」

何だか落ち込んでしまう。

「くそー！それにしても、リンネンちゃん可愛かったな」

ユン達が、後方で玄関の戸を閉めた時、俺とバインは、再び時空の彼方へと消えていった。

昨日の夜に起こった火も消え去り、黒焦げた屋敷の残骸が、ブスブスと音をたて燻っている。

「やーい。石ぶつけてやれー！」

タンペイは無残にも気絶した状態で、門の所に逆さ貼り付けされていた。

その横には、『スカイ・アル・グレイ参上』と言う文字と、店先に張られていた賞金首の五百万グランの似顔絵が一枚貼り付けられていた。

第五章 エピローグ（後書き）

短いお話でした。

本当は、宝石の数だけお話し作れたら良いな。何て思ってる作品です。他にもこの話の別バージョンあるんですが、それはまた機会があれば。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2624d/>

時空放浪記

2010年10月8日15時34分発行